

## 第2回 小田川付替事業環境影響評価技術検討委員会 (議事要旨)

開催日時：平成23年10月6日(木) 14:00～16:00

場 所：マービーふれあいセンター 1階 展示室

出席委員：

内田 和子（岡山大学大学院 社会文化科学研究科 教授）

奥島 雄一（倉敷市立自然史博物館 学芸員）

河原 長美（岡山大学大学院 環境学研究科 教授）

笹岡 英司（元岡山大学大学院 環境学研究科 教授）

佐藤 國康（元川崎医科大学 教授）

(欠席) 西垣 誠（岡山大学大学院 環境学研究科 教授）

波田 善夫（岡山理科大学 学長）

丸山 健司（日本野鳥の会 岡山県支部 支部長）

8名中 7名出席 1名欠席

議事要旨：

### 1. 委員会の成立について

- ・委員会規約第5条の2に基づき、出席者数が8名中7名であることから、委員会が成立していることを確認した。

### 2. スケジュールについて

- ・小田川付替事業の環境影響評価手続きのスケジュールについて、事務局から説明を行った。

### 3. 環境影響評価の項目等の選定について

- ・第1回技術検討委員会で審議した環境影響評価項目等の選定の変更及び再確認事項について、事務局から説明を行い以下のとおり了承された。

事務局：「土壌に係る環境その他の環境」の「地形及び地質」の供用後については、自然的状況の調査範囲において、重要な地形及び地質に関する文献その他の資料により「重要な地形及び地質」が存在しないことが把握されたため、「地形及び地質」を省令の参考項目から削除したい。なお、地形及び地質の担当の西垣委員へ説明し、了承いただいている。

事務局：水環境の水質（健康項目）の供用後については、「柳井原貯水池内を河道化するための埋土が実施されることから、供用後は貯水池底泥からの健康項目物質の溶出が想定されず、影響を受ける恐れがないと考えられるため、省令の参考項目に追加を行わないことを再確認させていただく。

委員長：水質基準点の霞橋地点では、健康項目について環境基準を超えるようなことはなく、貯水池内でも現状で環境基準を超えていないため、埋土を実施することによりさらに溶出は起こらない方向になると考えられる。

委員長：供用後については、健康項目に関して項目追加しないこと、重要な地形及び地質については項目削除すること、の2点について了承されるか。

委員：了承する。

#### 4. 調査、予測及び評価の手法の選定について

- ・調査、予測及び評価の手法の選定についての説明を事務局が行い、以下の質疑及び助言がなされた。

##### 【大気環境、水環境、土壌に係る環境その他の環境】

委員：予測対象時期について、騒音や振動が「最大になる時期」とあるが、建設機械の稼働の最大時期と工事用車両の最大時期は一致するのか。それぞれの予測は行うものと思うが、相乗効果というような加算された影響というものもあるので、工程表と照らし合わせ、工事实態として影響が最大になる時期での予測も検討されたい。

事務局：施工方法や施工時期を合わせて、予測時の参考にさせていただく。

委員長：準備書の段階での議論になるが、水環境では、水質保全の観点から、どのような時期にどのような工事を実施するかが重要になる。

委員長：この事業では地下水の問題が非常に重要になると思われる。地下水の水位の調査地点は、集落との関係から設定したのか。

事務局：工事中に柳井原貯水池の水位を下げる影響に対して、柳井原地区に調査地点を設定している。また、河川水位が低下する影響に対しては、真備平野に調査地点を設定している。

委員：予測の手法の表現が分りにくい。例えば、地下水の水位では、「地下水の水理に関する解析又は地盤の圧密に関する解析若しくは事例の引用又は解析」という表現になっている。最初に「地下水の水理に関する解析」とあるのに、最後にも「又は解析」が出てくる。重複ではないか。

事務局：最後の「又は解析」を削除させていただく。

委員：地下水の水位観測について、本地域では井戸を使っていると思うが、井戸の観測か、又は新たな観測井戸を設けるのか。

事務局：ボーリングで設けた観測井で水位計により継続観測する。

##### 【動物、植物、生態系、景観、人と自然との触れ合いの活動の場、廃棄物等】

委員：調査地域の設定で、流況が変化することで調査地域としている、高梁川の17km 付近より上流、小田川の宮田堰より上流の河川部分については、河床材料の粒径等の環境変化については、データとして出てくるのか。

事務局：準備書の段階で流況や河床材料の変化等について記載する。

委員：柳井原貯水池が付替えによって河川に戻るなので、ネガティブな改変ばかりという要素だけでなく、プラスの効果の予測評価がどこかにあっても良いのではないか。

事務局：今後予測するため、準備書の評価で記載されると想定している。

委員：植物に関しては、これまで多くの調査が行われているので調査地域の設定等問題は無い。生態系に関しては、河川を中心とした上位性ということでサギ類

という設定で良いのか。

委員：サギ類にもいろいろな種類があり、様々な環境利用をするので、上位性の注目種として適していると考ええる。サギ類を選定したという点は評価できる。

委員：「人と自然との触れ合いの活動の場」の例で、自然観察等が挙げられているが、調査の対象は「場」なのか「活動の内容」なのか。

事務局：「場」が対象である。

委員：具体的には施設名称が付いている場になるのか。博物館や野鳥の会等が任意の場所で自然観察会等のイベントを開催した場合、調査対象にならないのか。

事務局：環境影響評価では、広く一般に活動される場に着眼しており、一時的なイベントは対象としていない。

委員：調査すべき団体は限られているので、活動実績を調べるのは可能と考えられるが、対象はやはり「場」なのか。それで問題ないのか。

事務局：任意の場所における活動については、工事中に配慮することなどはできると考える。

委員：「人と自然との触れ合いの活動の場」の調査地点の4地点は、自治体などにより何らかの「場」として位置づけられているのか。

事務局：地域の自然的状況において把握した「人と自然との触れ合いの活動の場」の中から選定している。

委員：了解した。

委員：参考資料に関連して、過去に小田川（重要種の生息情報のため特定場所は不開示）でアユモドキの生息情報があると聞いている。また、「マシジミ」という記載はタイワンシジミとの交雑があり間違っている。

事務局：マシジミについては訂正する。

委員長：「廃棄物等」で、「建設副産物に係る予測・評価に必要な情報は、事業特性及び地域特性の把握によって得られることから調査は実施しない」とはどういう意味か。

事務局：施工計画から廃棄物の種類や量について整理するため、その意味での調査は行う。

委員長：廃棄物とは泥や土が中心か。

事務局：発生土が中心であるが、コンクリート殻等も想定される。

委員：柳井原貯水池の深い部分の水深はどのくらいか。

事務局：水深は最大で10～11m程度。埋土の厚さは最大で9m程度である。

委員：深くなった原因は何か。

事務局：過去の砂利採取により人工的な形状をしている。

#### 【全体】

委員長：ここでご説明された調査地域、調査・予測方法等の考え方で方法書を作成していくということでした承されるか。

委員：了承する。

## 5. 動植物の重要な種等に関する情報開示の考え方について

- ・動植物の重要な種等に関する情報開示の考え方についての説明を事務局が行い、以下の質疑及び助言がなされた。

委員：猛禽類で、「種の保存法の4種については不開示」とあるが、その他の猛禽類についても繁殖状況が把握されたものについては不開示にしていきたい。ただし、ミサゴは、誰が見ても分る場所に巣を架ける種類なので開示でもよいと考える。

事務局：検討する。

委員長：猛禽類に関するご意見を追加した上で、動植物の重要な種等に関する情報開示の考え方について了承されるか。

委員：了承する。

## 6. その他

- ・台風12号出水についての状況説明を事務局が行った。

以 上

■第2回小田川付替事業環境影響評価技術検討委員会後に頂いたご意見

聴取日：平成23年10月31日(月)

委員意見：付替えにより柳井原貯水池の止水環境が流水環境となり、止水域に生息・育する動植物の生息・生育環境が大きく改変されることが想定される。特にアサザは、流水域に生育しにくいとされているため、水位変動等現状の生育条件の調査を実施すること。

以 上